2013.8.30　探険隊　熊坂

湊町酒田の街歩き「山王山かいわい」

＊「酒田の歴史」等酒田市作成の資料やガイドブック、田村寛三氏著作の「さかた風土記」等を参考に、各関係者からの聴き取った内容をまとめたものです。

①あらき米屋
天保３年(1832)に創業。創業１８１年。米俵一俵７５ｋｇから６０ｋｇに基準を変えることを広めるきっかけを作ったのが先祖におられる。主屋は木造平屋建て。通り土間(庭）が奥まで続き、東側に庭が配置されている。採光のために明かり窓、夏用の簾戸などが設えられている。

②うなぎ玉勘
創業江戸末期、現在５代目。酒田で鰻といえば玉勘。
一度白焼きにした鰻を蒸してからタレをつけて焼く関東風。

③市原平右衛門商店
創業明治３６年。天然醸造で仕込む赤味噌。国産大豆と山形県産米を使い、余計な添加物加えず、半年間自然の温度で熟成させる。工場奥の土蔵は、本間家から譲り受けたものを移築したもので、レンガ造りの麹室と共に創業当時のもの。現在は使用されていないが、味噌樽がずらりと並んでいる。主屋は大正時代築造。

④海向寺
森敦の小説「月山」の舞台となった湯殿山注連寺の元末寺で、真言宗智山派。庄内には六体（山形県内に八体）の即身仏（ミイラ仏）があり、そのうちの二体が即仏堂に祀られている。同寺の第八代住職、鉄門海上人も衆生済度の為、自ら即身仏となったと伝えられています。即仏堂には忠海上人(1755年入定)、円明海上人（1822年入定）の２体が安置され、いずれも五穀断ち、十穀断ち、1000日修行を積んだもので鉄門海上人の遺品その他も展示されています。
７７段の階段を上ると酒田の繁華街が見晴らせる。

⑤旧割烹小幡、NKエージェントビル
明治初期から料亭を営み、港や日本海、市街地を一望できる景勝地にあることから「瞰海楼」と呼ばれた。平成１０年に廃業。第８１回米アカデミー賞外国語映画賞(2009年)を受賞した、「おくりびと」の舞台（「NKエージェント」の社屋など）として使われました(2007年)。現在は、酒田市に寄贈され一般公開されている。また、2013年、本館脇の蔵が、公益大の学生を中心とする「カフェの会」と小幡を管理する酒田ロケーションボックスの連携で、「くら日和」と名付けられたカフェを実験的にオープンした。

⑥随身門
現在の随身門は、本間光丘の寄進したものが明治２７年（1894）の震災で倒壊したため、明治４０年（1907）に本間光輝が再建しました。門の下でかしわ手を打つと日光の鳴龍にもおとらない響きがし、ここは「鳴き天井」と呼ばれています。また、門をくぐると通路が直角に曲がるが、これは聖境と俗界を区別するためだそうである。「至誠通神」の額は東郷平八郎の揮毫によるものです。

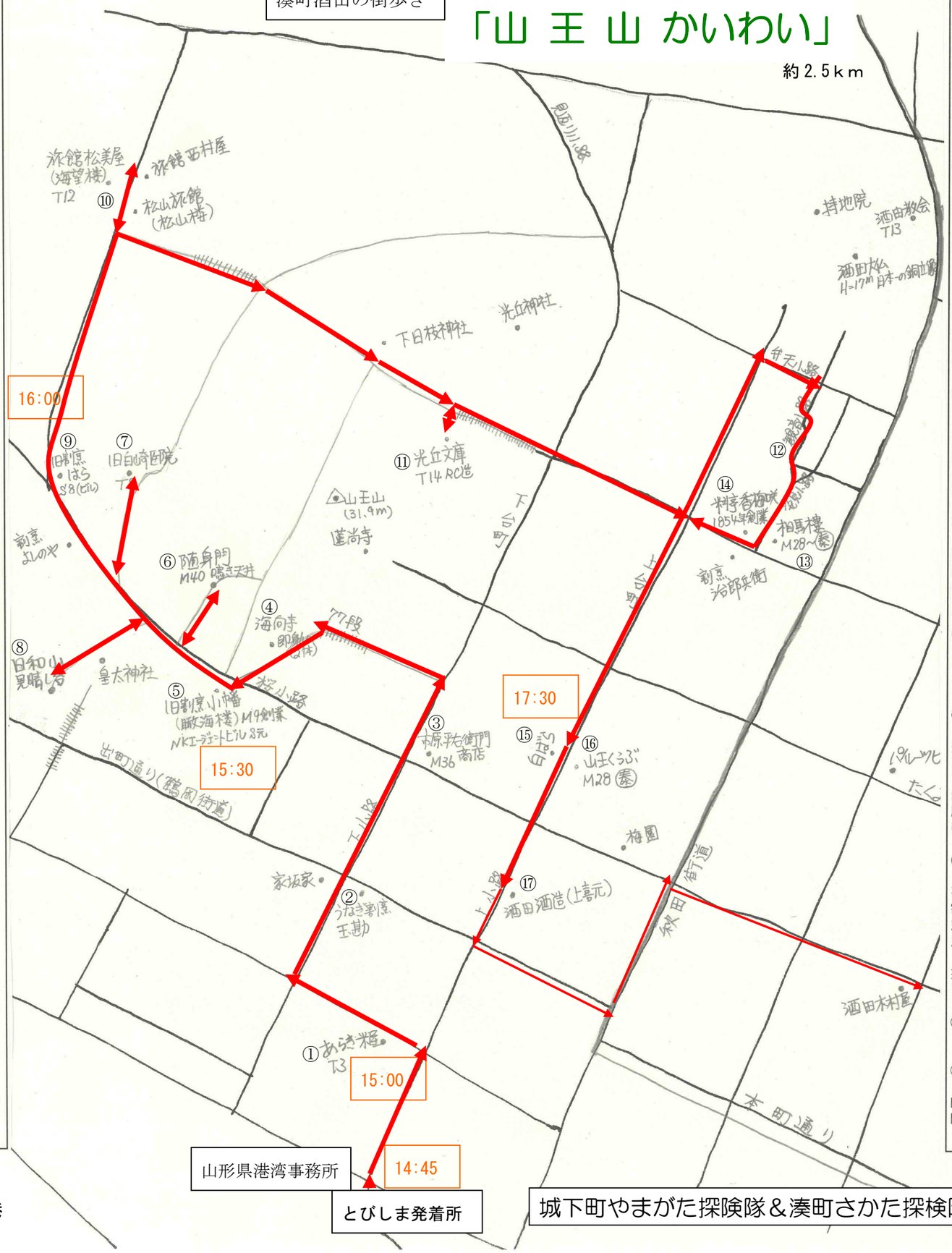
⑦旧白崎医院
旧白崎医院は、昭和５３年６月まで本町通りに面した電報電話局の向かい側あたりにあったが、昭和５１年の酒田大火後の火災復興土地区画整理事業により解体されることになった。しかし、この建物は大正８年(1919年)築造で酒田市唯一の木造洋風建築で、デザイン、材料とも優れているため、市の指定文化財として保存するため、昭和５５年現在地に移築復元された。
この建物は、前所有者である白崎重弥氏の祖父で、油問屋を営んでいた白崎敬之助氏が自ら設計し、重弥氏の父重治氏が外科医であったので、外科医院として一階を医院に、二階は家人の住居として造られた。棟梁は、白崎家出入りの大工小松友治郎で、本間家別荘の御車寄の建物も手掛けている。

⑧日和山見晴し台（公園案内地図による名称）
港が対岸の宮野浦から移ってきて以降、船の出入や天気を占う（トう）小高い丘として利用されたと見られるが、文化１０年(1813)、紀州日方浦の船頭３人が提唱して、さらに土を盛り、三尺ほど高くし、その上に常夜灯（綿積石の一つ）を建てて現在の灯台の役割も果たすようになり、この頃から明確に日和山（別称、ト晴台）と呼ばれるようになったようです。
明治２３年公園法により日和山公園となり、大正４年羽黒町出身の星野勇三北大教授らの設計で大改造が行われた。公園内には、常夜灯の他、日本最古の洋式木造六角灯台や方角石、瑞鷹蔵跡などがある。

湊町酒田の街歩き

「山 王 山 かいわい」

約 2.5ｋｍ



⑨旧割烹はら
現当主の祖父が「合羽屋」を営んでいてゴム製品を入れるために昭和８年に倉庫を建てた。ゴム製の生理用品を発明し繁盛したという。祖父は釣り好きで日和見として４階建ての鉄筋コンクリートのビルを建てた。主屋は、昭和１０年に松山藩の大地主の建物を買い取って移築したもの。
昭和３０年代後半から割烹を営んでいた。庭は、山王山の斜面を利用して造られている。

⑩旅館松美屋（海望楼）、松山旅館（松山楼）
旧遊郭。海望楼は大正１２年築造の鰻絵。

⑪光丘文庫
本間光丘の奨学の意思を継いだ八代当主光弥によって大正１４年(1925)完成。銅板葺き社殿造りの本館と３階建ての書庫を持つ。酒田発の鉄筋コンクリート建造物。現役の図書館で所蔵資料展示も行っている。

⑫酒田の小路（見返り小路、弁天小路、観音小路、姿見小路）
酒田の小路名は六十六に及ぶそうです。
「寺院・神社や豪商の名前に由来するものが多いが、中にはお夏小路、じろま小路など名もない庶民の名がついてあるのは、いかにもふさわしく、また、姿見小路・見返り小路・三味線小路は粋である」と田村氏は言っている。
柳小路や肝煎小路のように道幅が広いのに小路名で呼ばれるのは、酒田は碁盤目で東西が主軸であり、南北の通りが小路名になっているのは本市の特徴であるということです。

⑬相馬楼
江戸時代から酒田を代表する料亭であった「相馬屋」を修復し、「相馬楼」として平成１２年３月に開楼。建物は、明治２７年の庄内大震災の後、残った土蔵を取囲んで昭和２８年から再建されており、平成８年１１月国の登録文化財建造物に指定。２階の大広間は宴舞場として、酒田舞娘の踊りと食事を楽しめる。また、楼内の土蔵には雛人形や竹久夢二などの美術品が展示されている。酒田の棟梁佐藤泰太郎が作った。

⑭料亭香梅咲
江戸末期の安政元年(1854)創業。表門に咲く紅梅の古木が屋号の由来。出雲大社の第８０代国造（宮司）千家尊福（せんげたかとみ）氏が訪問した際に命名したとのこと（同氏は山形の老舗料亭の四山楼の扁額も書いている）。玄関から太鼓橋を渡って部屋に続く。初代女将池田吉代が創設した屋号は「芳香亭」で、現在、山居倉庫の一角にある料理店で復活している。

⑮白ばら
東北・北海道唯一のキャバレー。昭和３３年(1958)創業。６９年に３階建てに建て替えた。フロアは約７００㎡（２００坪）。ボックスが２７あり、客は１１０人入れる。往時はホステス９０人が在籍したという。

⑯山王くらぶ
明治２８年建築の料亭「山王くらぶ」が、１１０余年の時を経て、新たな観光拠点として生まれ変わった。この建物は、外観もさることながら本市で一、二の格式を誇った老舗料亭にふさわしく、各部屋ごとの組子建具、床の間などは銘木をふんだんに使った優れた意匠となっている。館内には、北前船でにぎわった時代を中心とした展示エリアと、市民と観光客がふれあう傘福などの体験工房と常設展示室などがある。相馬楼や六角灯台を手がけた酒田の棟梁佐藤泰太郎が作った

⑰酒田酒造
創業昭和２１年。酒田の市街地に残った唯一の蔵元で銘柄は「上喜元」。現在石数は１０００石程度と、量よりも質を重視しており、現在では生産量の約８割程度が特定名称酒(本醸造以上)になっています。酒田酒造の先代は地主でしたが、非常に美食家で、中でもお酒には目がなく、自分が本当に旨い酒を飲みたいが為に、頑固なほど旨い酒造りに没頭したそうです。
現社長の佐藤正一氏も昔は造り酒屋を営んでいた家柄で、山形県内で５本の指に入る名杜氏です。社長自ら造り出す酒は、利益より味を追求した贅沢な造りの為、量産が出来ず、愛飲家からは心配される程。

⑱最上屋旅館
旧館は大正末期の築造。昭和元年築造の木造三階建て。

⑲酒田河岸八町
本町や船場町には大問屋が軒を並べていたが、北前船の船員達は、河岸の小問屋や船宿に泊まったという。また、ここには山形・長井・大石田などの回船問屋の支店が多数置かれていたという。

城下町やまがた探険隊＆湊町さかた探検隊　ジョイントウォーク　2013.8.30